

悲華經の檀波羅蜜行について

宇治谷 祐 顕

一 悲華經旨の特質

悲華經とは、私がしばらくこの学会で報告してきたように、弥陀対釈迦の一大本願經であると同時に、またその一大本縁の經でもある。わけてもこの經の経題がよく示しているように、浄土建立のアミダ仏は四法懈怠の菩薩であり、これに反し釈迦仏がごとき現身に五洵刹土に出現して、まこと有情救済に乗り出したのは四法精進の大悲 Mahakaruna の菩薩であると、ひたすら釈迦仏の大悲応現を強調してゆくところにその特質がある。

二 釈迦仏の五洵刹土出現

さてこの經の説相によれば、アミダ仏の前身は Arāṇemiṇ 無諍念（秦訳―離諍）なる国王であり、一方釈迦仏は Samudrāreṇu 宝海（秦訳―海濟）と名づけるその国王の家臣であり、いわば主従の關係において説きすゝめているところも、

悲華經の檀波羅蜜行について（宇治谷）

大悲応現という大乘精神の真髓を発揮する意趣から類推してはなはだ興味深い。すなわちいま一国の国王をはじめ、王の千子らを、この家臣である宝海自身がすゝめて無上菩提心を發起せしめ、諸本願を発意せしめて、浄土成仏を果さしめてゆくが、その家臣宝海たゞひとり五百大願を建立し、娑婆世界の生死に流転し、救護なき五洵の有情を憐んで、その心の動くこと緊手樹葉の如く、ひたすらに五洵刹土出現に乗り出す大決意を発起する。

三 六波羅蜜の實踐と授記

かくて、その五百大願建立にさきだつて、まづ大乘六波羅蜜行の實踐を誓願し、わけても最初の Dana（檀）波羅蜜行を力説し、飯食、医薬、衣服、臥具、舍宅、華香、瓔珞、塗身香、侍使、幢幡、宝蓋、錢財、穀帛、象馬、車乘、金銀、真珠、琉璃、頗梨、珂貝、璧玉、真宝、珊瑚、天冠、弘飾等を大悲心もて施与し、なおそれでも飽き足らない場合は、奴

悲華經の檀波羅蜜行について（宇治谷）

婢、聚落、城邑、妻子、男女、手腕、鼻、舌、頸、目、皮、血、骨肉、身命までも喜捨し、しかもいさゝかも悔心を生ぜず、人天の善果の報を志求せず、ただ調伏して専ら衆生を摂受せんがためであるとの大悲心の発露を誓願するところから始まるが、その五百大願がいよいよ終結するに及んで、再び大乘修学の諸人は、いかにしても六波羅蜜行の修習すべきであると結びとつているところは、釈迦仏が五洵刹土応現えの大悲の精神と大乘の真髓を終始あますところなく鼓吹しているものと見てさしつかえない。

かゝる殊勝の誓願を建立するので、この經の師仏である宝藏如来は釈迦仏の本生たる宝海梵志に対して、当来娑婆世界に成仏して釈迦如来と称すべしと授記するのが、この經の枢軸をなす授記品（第四品）の説相である。

四 大悲比丘の檀波羅蜜本生説話

かくて、次の第五品檀波羅蜜品（大Ⅲ、二二〇、b）には、当来宝海梵志なる大悲菩薩は宝藏如来を頂礼し、各種の三昧、助菩提の法等を問ひ、その教示をうけて、これを受持するが、その師仏宝藏如来般涅槃後、大悲比丘命終して、人寿八十才の Satkarsana 国、旃陀羅の家に生をうけ、ついで閻浮提に転輪王となり、一切衆生に十善業道をすゝめ、みづからは尼乾子・灰音 Paṇḍu-ghoṣa の乞求に応じ、身皮・眼目

等の施与をはじめ、順次生をうけて、屢次にわたる檀波羅蜜行の実践成就を説き明かす。

すなわち旃陀羅生をうけた大悲比丘は本願を以てのゆえに、その身長大にして、強力旃陀羅となり、国王から請受したすべての財物を人民に施与し、人寿増益して八十才から満五百才となるときに国王命終するので、諸大臣はその強力旃陀羅に王位を継紹せしめ、功德力王 Puṇyabala rāja となつて、二国土を領有し、閻浮提のあらゆる衆生に意の如く給施する。

ときに一尼乾子・灰音 Paṇḍu-ghoṣa あり、阿修羅退治のため、その所須の用具として、未死人の皮と眼目を求める。かくして、王は灰音の呪術達成のため、右手にて両眼をえぐり灰音に施す。また尼乾子・灰音は王の請によつて利刀を以て、その身皮を剥ぎ取るも七日間命終せず、乃至一念も悔心を生ぜず、これらが本願力による釈迦牟尼前生における順次の勇健であつて、かゝる身を捨つる実践行の檀波羅蜜行は過去八丈夫を除いて、誰一人もこれを行じたものなく、また未來世においても行することのできないもので、一つに本願力による勇建行なることを強調し、引きつゞき往昔の因縁談を次の如く具さに物語る。

1、眼施品第二十三……秦訳（大Ⅲ、二八〇、a）
このところ、無識訳「悲華經」では、ジャータカ形式によ

り、いくぶん不調整のまゝ、順次にその因縁談を説きあかしているが、異訳の「悲分陀利經」では、それぞれに品名を附与して、かなり整然と訳づけしているから、いまの場合、その品名をかりて説述する。

2 身施品第二十四(大Ⅲ、二八一、c)

人寿百才の無垢須弥界あり、難沮壞 Durdhara (秦訳―無勝) 王となる。千子あるも、そのうち六子、菩提心をおこさざるによつて、王は閻浮提を与えるが、閻諍を事とし、人民飢餓に苦しむ。そこで王は股体、血肉を施捨し、願力を以て肉山となるも、一念も悔心を生ぜず、乃至は十方恒河沙等の諸仏世界に遍満して、身を捨て、眼目を捨施するの檀波羅蜜行を行ずるが、それは一つに大悲心の故にて、いさかも人天の果報を求めざるものであることを強調する。

3 宝施品第二十五(大、Ⅲ二八二、c)

また無量劫をすぎ、五洵惡世の月雷世界 Candravidyuta (秦訳―月明) に燈光明 Asmijambūḍṭīpa (秦訳―燈明) 王となる。そこにて一人の納稅義務を怠った人の身代りとなって助け、また五百商人中の一商主・満月 Candia が大海に入り珍宝を取るも、大羅刹の大惡風に遭ひ道を失う。そこで王は燃臂して道を示すこと七日七夜に至つた。

4 医方施品第二十六(大Ⅲ、二八三、a)

無量劫をすぎ、網 Srimina (秦訳―日藤昧) 世界の婆羅門家に生れ、須香 Sūryamālagandha (秦訳―鬘香) と名づけ、病者

悲華經の檀波羅蜜行について(宇治谷)

のために毘陀呪を修し離病せしめて、如来愛護三業善根の種子と名づける。

5 現伏藏施品第二十七(大Ⅲ、二八三、c)

また無量劫をすぎ、選択諸惡世界 Vicīḍaśa (秦訳―除穢) あり、東方五十四天下に転輪王となり、虚空淨 Ambara (秦訳―虚空) と名づけ、大誓願をおこし、無量の珍宝藏を示現し、七反身をうけて一切施と号す。

そこに青香明乞食あり、閻浮提の施与を求めるので意の如く給施するが、引きつづきまた、

○盧志婆羅門 Roca (秦訳―盧遮) …………… 兩足

○牙婆羅門 Daṣṭāvā (秦訳―陀吒波) …………… 兩眼

○淨堅牢婆羅門 Saracchighosa (秦訳―堅紅) …… 兩耳

○想尼乾子 Sañjivana (秦訳―逸林) …………… 男根

○有 人…………… 血肉

○蜜味婆羅門 Kṣīrasaparibṛājaka …………… 兩手

(秦訳―日味婆利波羅闍)

など、左記のごとき乞求に応じて施与をなし、未來世に広長舌相を成ずることを明かし、更にまた命終して、示現宝藏 Nāgāli-sandarcana (秦訳―現伏藏) と名づける竜王となり、七反身のあいだ種々の珍宝を施捨して、三十二相を具足し、その後また無量劫をすぎ、珊瑚池世界に釈提桓因・善日光明 Virocana (秦訳―等照) となり、閻浮提の諸人惡行をこととする故に、夜叉の像と化して諸人を善道に進ましめ三乗中に住せしむ。

悲華經の檀波羅蜜行について（宇治谷）

如上が釈迦牟尼前生における檀波羅蜜行の大意であるが、この悲華經においては、これら捨身の行はすべて大悲 *Maha-karuna* の実践行を措いてほかならぬことを強調して檀波羅蜜行の結論とするところに深い意趣がうかがい得られる。

五 本生説話の成立構想

そこで問題は、如上悲華經所説の釈迦仏本生説話の成立構想であるが、いまこれを他の現存本生説話類と比較照合してみると、大要たの如く対配せられる。

1 身施品第二十四の功德力王、身皮、眼目を施捨するの本生説話の説相は、

- a 撰集百緣經出生菩薩品三十三の尸毘王剗眼施鷲緣、および諸天下下供養品第六の五四の功德意供養塔生天緣に、
- b 本生鬘論卷第一の投身飼虎第一、尸毘王救鴿命緣起第二、同じく卷三の慈力王刺身血施五夜叉緣起第八に類同する。

2 宝施品第二十五燈光明王燃臂の本生は、

- a 撰集百緣經、受報応供養品第二の十八、如願臨形財求仏出家緣、
- b 同、菩薩授記品第一の四、五百商客入海採宝緣、
- c その他、増一阿含、菩薩本行經上、法華經藥草喻品などの説話に類同する。

3 医方施品第二十六須香婆羅門病緣医藥の本生説話は撰集百緣

經菩薩授記品第一の六、婆持加因病緣に類同、

4 最後の現伏藏施品第二十七虚空淨の「一切施」本生説話は

- a 増一阿含第三十七、八難品の「平等施」、および同第三十八、馬血天子問八政品第四十三所説の「檀越施主」と「求三十二相」の説相、

- b 菩薩本生鬘論卷三「慈心竜王消伏怨害緣起第七の説相、にも類同する。

六 説話の基本構想とその特色

A 説話の基本構想

上來、考察してきたのが、悲華經所説による釈迦牟尼本生行における檀波羅蜜行に関する概要であるが、そこに説き示される釈迦仏本生説話の素材は、いわゆるジャータカ一般の説相に因んで、その身体、眼目の施捨によることには異論がないが、その説述様式の順次に説き出される説話構成の全容は、これを仔細に検すると、概して左のごとく要結せられる。

- 1 増一阿含經第三十七・八難品（第四十二の二）に見られる「八大人念」、また阿那伽耶尊者の慈心による「平等施者」の説相と、

2 また同じく第三十八・馬血天子問八政品所説による宝藏如來出現説が、悲華經所説の善知識仏である同名の宝藏如來出現の

説相と彼此よく対同すること。

3 次に悲華經檀波羅蜜行中の宝施品(秦訳)に所現する燈光明王本生説話が、同じく増一阿含、馬血天子品の燈光如来の下に牟尼女人が一切の檀越施主を、また三十二相具足を見るところの記流に一脉相通ずる。

上述の諸点から類推すると、悲華經所説の釈迦仏本生説話の基本構想は、右の増一阿含經の本生話を枢軸として、それに菩薩本緣經類の釈迦仏本生經としての撰集百緣經、菩薩本緣經(一切施品第二、竜品第八)、菩薩本行經卷上、大方便仏報恩經、乃至は菩薩本生鬘論所説中の仏本生經類の説話を彼此よく合融して描き出されたものと解せられてよい。

B その特色

次に悲華經所説中の釈迦仏本生行中における檀波羅蜜行の特色としては、如上論述から左の如く要約せられる。

1 一般にジャータカにおいては、犠牲的構神の発露による身血、眼目の施捨が、その最終幕において、ハッピー・エンドとなるのが常套手法であるが、これに反して、悲華經では全面犠牲による檀波羅蜜行を打ち出すも、大乘系本緣經の持つ一般特色としての一念の悔心もなきことを一段と強調する。

2 そして、それはまた一般ジャータカによる説相とは無論異なり、菩薩本緣經としての撰集百緣經や菩薩本緣經などによる不墮惡趣、天上人中の快樂などを得ようとする善果の果報を教示するのではなく、

悲華經の檀波羅蜜行について(宇治谷)

yathā tvaṃsvaṇṇarajivitaṃ

kāraṇyāhetor na ca svargāhetoh/

とあつて、大悲心 karuṇyāhetu 成就のよくしからしむるものであり、Svargāhetu(生天の果報)の故ではなく、すべて大悲の本願によるものであることを随處に打ち出していること。

3 なおこの經所説の檀波羅蜜行が終末するに及んで、その徳相の顯成就として、広長の舌相や三十二相の具足を物語るのも、増一阿含經・馬血天子品の記流に従つたといへ、一面この悲華經が持つ有情教化の目途を果たそうとする大悲應現の釈迦仏檀波羅蜜行実践にかかわる緊要な特色であると見てよい。

1 悲華經の現存異訳異本

① 悲華經十卷、北凉玄始八年(AD 四一九)曇無讖訳六品
② 大乘悲分陀利經八卷 秦時(AD 三八四—四一七)失訳、三十品、

③ 梵本 Karuṇapūṇḍarika 五品、カルカッタ公刊本(AD 一八九八)ほか、

④ チベット訳(デリゲ、cha 函 p.) 数個の写本現存(山田一止著 Karuṇapūṇḍarika 参照)

Hphags-pa shün-ri'e padma dkar-po
shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo 十五卷、五品

2 無讖訳では歡喜国、秦訳では集穢国(大Ⅲ、二八〇、a)と訳出する。チベット訳及びこの文段の経意から類推すると、秦訳の「集穢」が適切である。

3 拙著「悲華經の研究」四三頁参照。

(昭、四四年三月、文光堂版)